

吹田市佐井寺 風土記こぼれ話(四)
編集部

佐井寺より釈迦ヶ池への水路について

年月が経つにつれて、人口の増えることは当然なこと
とで、農地も殖やさなければならず、用水もだんだん
不足勝ちになる。ひつきよう他所のどこからか、求め
なければならぬ。

当池の面積八丁と聞いているが、岸部百町歩？を養
うにはなお十分とはいえず、土地の高い佐井寺村の水
を受けることを考え、白羽の矢の的となったのである
う。

これがいつ頃のことかは知らないが、詳しいことは史
学専攻の諸先生に、お任せすることにして、私は先輩
古老の各氏から聴かせてもらった、数々のお話しを記
してみよう。

水利の問題が表面に出始めると、当時の土地土地の
有力者達が、我田引水の権利獲得で争うのは今も昔も
同じこと、味舌(ました)は市場池、岸部の方は釈迦
ヶ池、との各有力者達が、淀藩に向かって猛運動を起
こしたようである。が、結局は岸部の方へ許可された。

ところが今度は、水路に当る用地買収問題にぶつ
かったが、双方円満に借りることに話がまとまった。

岸部水利組合からは今に至るも、佐井寺の和仁、坂本、
奥、前田、その他の土地所有者に対し、借地料を支払
っているらしい。

この水路の管理人として、代々弓場氏が携わり、そ
のお礼として毎年米一俵を、年貢代りに納めておった
ことも聞いている。この水路に沿う佐井寺の耕作者に
対しても、岸部村から鴨一羽づつを、贈呈しておった
ことも聞いている。春の頃になると岸部から、一三
十名の人々が当村へ来て、水門際(ぎわ)の溜まり場
所の土砂をさらえたり、取水口の整備に当たってお
ったことが、幾度も私の目に触れている。

この水路の繰り抜き(トンネル)の長さは七〇間(約
一二六メートル)である。今にして見れば、こんなも
のは朝飯前の仕事であるが、数百年前の幼稚な技術か
ら推せば、なかなかの大工事であったに違いない。相
当の犠牲者も出たことであろう。

社会情勢の急変しつつある現状においては、利用価
値も漸次薄らいではいるがやがては吹田市としての古
文化財に指定される可能性もあるこの遺蹟を、保存顕
彰して欲しいものである。

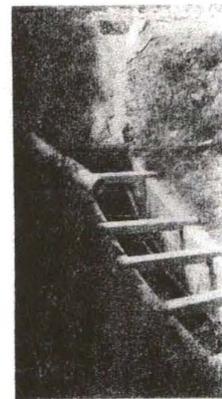
この図は、吹田高校教諭、清田倫子先生より拝借し
て写させていただいたもの、原図は一メートル二〇セ
ンチほどの龐大なもので、先生の彩筆による美しい地
図である。



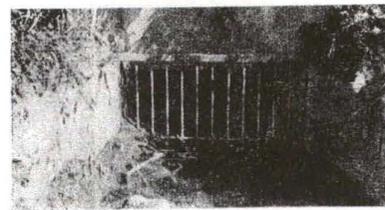
佐井寺村操り抜き、
長九七捨向余
堀割前後
長九捨八向余
土砂崩小池井用水入レ
九貳拾歩(巻程溝)
操り抜き分大池迄の溝
九百五捨向余
前後土捨場
九百分(巻程)

道筋
入水引落し
新溝

この地図と現地とを再三調べたが、長年の間にわたり、また数年前からの宅地造成の余波で地形も変わり、水路の幅も半分以上に狭くなりはしているけれど、トンネルの内の水路には、少し浅くなっている程度で、余り傷(いた)んだりはしていないらしい。



上図掘り抜きトンネルの敷出口、下図が取水口



かつての高速道路工事最中の或る日、このトンネルの箇所(取水口)を見て、感心しておられた人のあったことを、一年余りも経た或る日に、偶然私の耳に入った。

私とその直後に聞いたならば、工事事務所を訪ね、その技術者から種々と教わり、また私の足りないながらの説明を聞いて貰えば、納得もして下さったのである。

う：：に、と思うと残念でならない。当人は「昔この辺にお城でもあったのか、お寺お宮様等の名所も多いが、何故町の人をもっとこれを大切にしないのかなあ、不思議でならない」といったそうである。町の事情のわからない当人としては、もっともなことである。

「このトンネルの構造の仕組みは、今の技術でも難かしいのではなからうか」と首をかしげておったそうである。

今後とも研究の価値は大いにあり、私の数年前からの提唱も、決して無駄ではなかったことが、立証されてとても嬉しい。(三九・八・一一)

釈迦ヶ池の後日譚(一)

「雁と鴨」と「窯跡」について

この池の面積は八町歩、この養い田百町歩と聞いているが、摂津名所図会には三百八十畝とある。田畑も日に日に工場、住宅に潰されてゆき、水の利用価値もだんだんと減ってきている。

旧幕時代淀の藩主稲葉氏が、しばしばこの池へ招待を受けて鴨猟に来ている、近郷の他藩主達も、淀の藩主に招待されてよく来たらしく、村人達も応接に困ったことであろう。鴨は毎年秋になると、我々が想像する以上に沢山やって来る。常時三万羽以上は棲んで

おり「多い時には五万羽ぐらいは確実に降りてきて、広い大池(ともいう)も一杯に詰まる日が、幾日も幾日も続いたものである」と鴨猟をしながら池を監視している人々が、語っているのだから間違いはあるまい。

雁も沢山この池に渡ってきて、鴨の群と仲良く遊んでいるのが、夕方になると決まったように、鴨も群より一足先に、曼茶羅、安寿、地藏の各山沿いを飛んで、どこかの泥田に餌をあさりに、幾組も幾組も、編隊を組んでゆく有様は美しく、子供達も大喜びで「雁々聞きやれ(があんがんききやれ)先の奴にあとになれ(さあきのやーつああとになれ)後のやつ先になれ(あーとのやーつさーきになれ)くの字になれ(くのじになれ)と小守達も交じって口々に大声で叫ぶと、不思議にもこちらの註文通りになってくれるので、子供たちはまた大喜びで、繰り返し繰り返し叫びつづけるのであった。重複するが叫び声を続けて見よう。

「がーんがんききやーれ、さあきのやーつあーとになーれ、あーとのやーつさーきになーれ、くの字になーれ、へーの字になーれ」

鴨は毎日決まったように、雁の飛び去ったあと薄暮のころに、続々と群をなして低空を飛んでゆく。その羽ばたきの音は、大げさな表現であるが、飛行機低空

音にも似てまことに凄まじいものであったろう。

夜明け近くになると、雁、鴨ともに逆コースで、釈迦ヶ池へ斜めに向かつて降りるが、用心深い彼らは何回も何回も、旋回してからでないかと降りて来ない。それから泥だらけの羽根を洗ってから、葭（よし）の中へ潜り込むなり、各々自分の定めた場所へ屯（たむろ）する。

こゝで其の捕獲の方法を記しておこう。獵人は皆鑑札の所持者であり、朝と夕方との二回に網を張って捕えるのである。この捕獲には二つの方法を用いた。一つはカスミ網で、もう一つは無双網（むそうあみ）という。

前者は沿岸の松の大木二ヶ所へ、太い竹竿を括りつけ、池の周囲数ヶ所へ全じものを拵えて網を張り、他所へ餌を漁りにゆく時と、その帰りとを待つて捕える。

後者は汀の辺りの湿った土の上へ糶を蒔き、一羽が降りてくると安心して、次から次へと食べに来る。百羽位が溜まると、離れたところに見張りしている獵人が、力強く一本の綱を引いて、一網打尽式に捕えてしまふとか。

この人達は皆名人で、これを唯一の生活の資としている。当佐井寺でも鴨の欲しい時には、飼つてあるのを頒けて貰いに行つたものである。佐井寺村でも時偶には、村中の適当場所で、鴨の往き還りに捕らえてい

た人達もあった。

それなのに最近と云つても十年ほど前のことであるが、殆ど来なくなり、当節では時偶に「かいつぶり」塒（には）が遊泳して詩情を添えているに過ぎない。

この鴨群の来なくなった原因として挙げられることは、吹田操車場が出来てからは、大きな電球が無数について明るくなつたのと、操車支持のマイクからの声のにぎやか過ぎること、紫金山々麓に放送局の大鉄塔が建てられたこと、物凄い程に生い繁つていた池畔（ちはん）の大木群も、非常時という美名のもとに、濫伐（らんぱつ）の憂き目に遭い、現今では殆ど裸に等しく、その他種々な悪条件が重なり、鴨群の安住場所なくなつたことが最大の原因と聞いている。放送局の鉄塔は七、八年前に取り払われ、現在はエビオス会社の所有工場敷地となつている。

それから鴨は焚き火（たきび）の上ののと銃声が特に嫌いらしく、この池の周囲一キロぐらいでは、絶対に銃音を立ててはならないことになっていて、そのため立ち入り禁止の標柱も数ヶ所に建ててあり、当佐井寺への入口向井坂峠にも建てられてあつたそうである。

明治十四年、当時の独逸皇太子が東上の途中、鴨の獵場として有名なこの池へ遊びに来られ、無断で鴨を撃ち落とし、これを知つた岸部の監視員は激昂して皇

太子をなぐつたとか。

勿論当方もこの人が皇太子とは知らなかつたらしく、先方もこの辺りが禁猟区であるとは知らなかつたので、通訳を通じて陳謝したが、国際的な大問題となり、その監視員が自決したことにして漸く解決はしたもの、当時のわが国力からして、官民とも上を下への大騒動であつたらう。

左に数年前某氏から写させて貰つたものを、原文のまま、再録しておこう。

独乙皇太子腰掛けの松

「一名「根上り松」と云い、今は枯損（こそん）し、其影を止めざるも、明治十四年今の独乙魔帝カイゼル、未だ皇太子の砌、微行にて来遊せられ、この松に腰掛けをなし、鴨池の風景を称したり。

後鴨に発砲したりとて事件発生、国際問題を惹起し、直接の関係者は自刃の形式を取り、関係官吏の罷免により落着せり、其和解式は吉志部神社境内に於いて行われ、当時の実況を目撃せし古老今尚生存す、我国明治初年外交史の一頁を飾る旧蹟なり」云々

これも七、八年前のこと、一吹高生が、同池北岸で時の破片を拾つたことが清田倫子先生の耳に入り、他数名の先生と社会科考古学班の生徒三十名が、吹田市、

大阪府両教育委員会の後援を得て本格的な発掘にかかつた。民間所有地であつたため、思うようには果たせなかつたが、完全な土器も若干発見されて、相当の成果を挙げられたようである。

後日丁度この場所（登りがまのあつたところ）が、名神高速道路のため潰されることになり、一昨年七月六日、小雨のバラつく変な天気であつたが、我々十名程のグループと共に現地へ行くと、京大考古学教室から、横山浩一先生他数名の助手達と一メートル余掘り下げた二つの烟道で、丹念に破片を集めておられた。また助手と測量しつつ、しきりに製図をしておられる他の先生も見受けた。

先生の説明によると、一千二、三百年前に朝鮮民族が渡来し、登り窯（がま）製法による須恵器をこしらえていた。従つて温度も千数百度にも上がり、ロクロを使う技術も、この時に初めて使用されたとのこと。

今は既に名神高速道路の敷地となり、コンクリート造りの、美しいアーチ型の橋の影を池の面にうつして

いる。文化の進むにつれて、祖先の遺してくれた諸文化財が、惜し気もなく潰されてゆくことは、まことに寂しい限りである。消えてゆくもの、次から次へと新しく、生まれ出てくるもの等々、新陳代謝の激しさ！世は様々である。（三十九・八・二十）

釈迦ヶ池の後日譚(二)

「弓場」と「笠松」について

晩秋の或る日、曇り空の午後、掃除のよくゆきとどいた庭に、数十年も経たと思われる、形状の頗るよろしい五葉松、橘の扁平形のみが無数に見える、弓場氏宅を訪れる機会が偶然に到来し、弓場老から種々と珍しい話を聞かせて下さった。

その裡の要点の二、三を拾ってみよう。

私は今日迄にも、弓場という姓を余り聞いたことがない。「この屋敷と弓場の姓とに、何か関連性があるのではないか」と常々から不審に堪えなかつたのが、今日はからずも同氏より、聴かせて貰う機会を得たことは、大へんな倖せであつた。

今から幾世代か以前、徳川幕府の頃から、氏の現在の屋敷の辺りが、武士達の弓場(ゆみば)であり、此所から約二十メートル離れた土堤に、的場(標的)があり、その土堤の上に笠の形に拵がった、実に見事な大きな松があつた。

里人之を「笠松」と称えて親しまれ、近郷からの訪れる人々も相当のものであつたらしい。今はもう偲びうる何ものもない。この旧的場であつた土堤の真下に、井戸が二つ並んでいる。これを「笠松の井戸」と称えられている。

それから弓場氏宅の真横手に笠松氏宅がある。その辺りに当時の馬のつなぎ場があつたそうで、笠松の姓も弓場の姓も共に明治の初め頃にこの固有名詞から、名づけられたであろうことは肯ける。これで両姓の出所の謎も解けたわけである。



弓場氏は数代前から、谷庄ヶ池(たんじょうがいけ)から釈迦ヶ池に通ずる、水路の樋の管理の委嘱を受け継いで居り、大体春の彼岸から秋の彼岸までの期間中の、雨の降つた時には出来るだけ、多くの水を池へ送ることに決めてあつたらしく、毎年五月頃?になると、岸部から十数名の農民が泥濘えに來ると、いつも湯茶の接待をし、休憩もして貰つていたそうである。

此のトンネル内の上層部はどうしてあるか判らないが、両袖の下には太い太い松の丸太の、片面だけを削り取つて敷かれてあり、その下敷きには玉石(たまいし)程度のもので基礎となつているのである。丸太の上に袖石が載せられてあるらしく、それで当時からでも余り狂つていないらしく、当時としては偉大な土木工事であつたことが窺える。

数十年前のこと、この水路が詰まつて池へ水が來なくなり、岸部の住民が竹を継ぎ足したり、いろいろいろと工夫をしてやってみたが、何しろ七〇間余(約一三〇メートル)の長水路のこととて、思うに任せず困り果てゝいたところ、ある奇人が一策を按じ、トンネルの出口十間(約一八メートル)程の上から一メートル程の穴を開け、用意してきた「とうまる籠」を、ゴミ類が上から流れいようように伏せ、それを何回も根気よく繰り返したところ、見事に通水して皆の衆をホッとさせたこと云うことを聞いています。

そのお陰で直上の田圃は、修理不完全のためまたしても穴が開き、そこから水が吸われて、大変困つて居られたそうであるから、この明るい話も嘘ではないらしい。(三八・一一・二二)

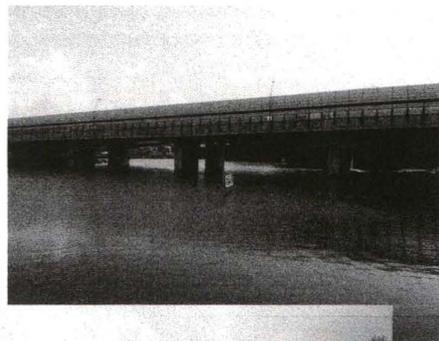
さしも難工事であつたであろう、この繰り抜きが果たしていつ頃に完成したものであろうか。判りかねて

居つたが、今でも此所の土地所有者である、和仁儀一氏宅に現存する、この場所の地租減免状に天明年号が記されてあることにより、これより以前に完成されて居つたことが判り、二百余年の月日が経過していることも、ハッキリとして嬉しい。

釈迦ヶ池とくり抜き水路(トンネル)の現況

今回も20浅野倉平さんが現地を訪れ、沢山の写真を撮つて下さいました。風土記こぼれ話を書かれた昭和30年代から半世紀が経ち、佐井寺、岸部共に田圃の宅地化・工場用地化が進み住宅やマンションが建ち並び、当時の面影は全く残つておりません。

釈迦ヶ池は農業用水池としての使命を終え、周囲の埋め立てで面積は三分の一に縮小、池の中央を名神高速道路が走っています。池のまわりには吹田市立博物館、紫金山公園が整備され、住民の憩いの場となつております。公園内には本文にある窯跡が、国指定史跡吉志部瓦窯跡(きしべがようせき)として保存されています。池ではたまに釣り人禁止ですの姿を見かけても、鴨の姿は全くなく、野鳥を見るのを楽しみに池の見えるマンションを買つた人が嘆かれたそうです。



くり抜き水路の両端は様変わりし、冒頭の写真の場所を想像することは全く出来ません。

くり抜き水路の取水口(佐井寺 1-25)
沈砂池(砂がトンネルに流れ込まぬよう一時溜めて砂を沈殿させる池)の跡が空地として残り、説明板が設置されている。トンネルは埋めてないと思うが取水口自体の跡はどこにもない。

くり抜き水路の放出口のあった場所(五月が丘南12)
現在は佐井寺東公園となり説明板が設置されている。
ここから池へと続く水路は暗渠で残っているのだろうか。

